学内広報

2024.9.24 no.1586

宇宙線研究所附属乗鞍観測所と「朝日の小屋」址碑

日本の宇宙線共同研究発祥の地!

→p.10

相談支援研究開発センター5周年
附属図書館の蔵書が1000万冊を突破
新しい大学のリーダーズが描く想像図!?

UTokyo 150 THE UNIVERSITY OF TOKYO SINCE 1877

困りごとや悩みごとに寄り添う学内共同教育研究施設

相談支援研究開発センター発足5周年!!

ミッションステートメントを制定しました

2019年10月に、6つの室（総合窓口、学生相談所、精神保健支援室、コミュニケーション・サポートルーム、ピアサポートルーム、留学生支援室）を統合して発足した学内共同教育研究施設・相談支援研究開発センター（佐藤岩夫センター長）。5周年の節目を迎えるのを機に、ミッションステートメントを発表しました。検討を重ねてきた5人の先生方に、その内容やセンターの概要・近況について座談会形式で紹介してもらいます。

メンバーの拠り所となる文章を

佐藤　2023年4月にセンター長に就任した私は、センターが多くの学生・教職員の困りごとや悩みごとに寄り添いサポートしていることに感銘を受けました。同時に、少し気になったのは、統合前の6つの室を超えたセンター全体のまとまりです。そこで、センターの組織的なアイデンティティを示し、メンバーの日々の活動の拠り所となるような文章があってもいいのではないかと考え、ミッションステートメント（MS）を検討するワーキンググループ（WG）を立ち上げました。熱心に議論してもらい、素晴らしいMSができました。

高野　私は学生相談所とピアサポートルームの室長を務めています。今回はWGの座長としてMS作成に関わりました。センター各室は歴史や役割も違っており、各室から集まったメンバーで丁寧な議論を行い、意見を集約しました。さらに、センター全員に下案を示して、オンラインとオフラインで意見を募ったところ、50件以上の意見が集まりました。私たちの活動の大きな柱である「個別相談」の強調や、表現についての意見など様々です。それをもとにブラッシュアップし、7月に制定しました。

「活躍」という語を議論で見直し

荒井　私はピアサポートルームで運営や指導を行い、週1回学生相談所でカウンセラーとして働いています。WGメンバーのなかでは最年少です。実は、ピアサポートルームからWGに誰が出るかを話し合ったとき、皆参加を希望しており、センターメンバーのMS制定への関心の高さがうかがえました。作成の過程で試行錯誤したのが、専門用語を使わずに誰が見ても分かりやすい言葉にするということです。また、全ての学生や教職員が疎外感をもたないような表現になるように、1ワードずつ検討を重ねました。例えば「自分らしく生きることができる」という一文。最初の案は「自分らしく活躍することができる」でしたが、「活躍」という言葉に引っかかりを感じる意見があり見直しました。

高野　MSはセンターにとってのUTokyo Compassのような指針という位置づけです。我々は何をするのかという「ミッション」、自分たちが進んでいく方向を示す「ビジョン」。日々の活動で大切にする「価値」、そして具体的なセンターの「機能・活動」の4部構成です。質の高い相談支援を提供し、構成員の自己実現に向けてサポートする。そして、相談の蓄積のなかから大学が抱える課題が浮かび上がってくるので、その改善も目指す。相談支援と関連する研究を推進し、社会にも還元していく。全ての構成員が健康を増進しながら、自分らしく生きることができる包摂的で安全なコミュニティを目指すということを盛り込みました。

渡邉　私は精神科医として総合窓口の室長を務めています。MSが出来たのはセンターにとって大事な転機だと思います。それぞれの室が専門性を持っているので、同じ問題でも解決の仕方や方向性がちょっとずつ違います。色々な仕事があるなかで、何を優先してどう組み立てていくのか。そこを迷うことがあります。特にギリギリの判断が求められる場面でです。その時に共通の指針があるのは非常に大きい。利用しようと考えている人も、センターの方向性が分かることで安心して来られるのではないかと思います。

長期化・複雑化する個別相談

渡邉　センターには6つの室があり、機能分化しています。相談にあたるのは20名以上の専門家で、英語や中国語の話者もいます。相談件数はここ10年で1.5倍くらい増加しました。それに加え相談内容が複雑になっています。これまでは、学生の場合、

相談支援研究開発センター ミッションステートメント

（2024年7月制定）

センターでは、心理学や精神医学、多文化コミュニティ支援等の専門家や関連する事務職員が、学生・教職員と連携・協働しながら、学生をはじめとする大学構成員のための相談支援活動を展開し、相談支援についての実践と関連する研究を行っています。これまで行ってきた大学構成員のための相談支援の業務を引き継ぎ、さらに留学生の支援や学生の就労支援・キャリア開発支援を加えて相談支援活動を拡充展開し、全学的な支援体制の充実を図っています。

ミッション

私たちは、質の高い相談支援を提供することで、東京大学の一人ひとりの学生・教職員が持てる力を十分に発揮して、それぞれの自己実現に向けて歩んでいくことをサポートします。また、個別相談の蓄積から浮かび上がってくるキャンパスの課題を明らかにし、学生・教職員と協働しながら、その改善を図ります。
そして、相談支援の実践と関連する研究の成果を大学コミュニティや社会に還元します。

ビジョン

私たちは、東京大学のすべての学生と教職員が、心身の健康を増進しながら、自分らしく生きることができる、包摂的で安全なコミュニティづくりを目指します。

価値

私たちは、以下の価値を尊重しながら各活動に取り組みます。

個の尊重
一人ひとりの個性や背景を尊重し、その人らしい生き方の模索を支援します。

誠実さ
利用者や関係者と真摯に向き合い、信頼関係の構築に努めます。

多様性
様々な価値観や背景を持つ人たちがいることを理解し、それらを尊重します。

公正性
参画機会の平等と構造的格差の是正を重視します。

包摂性
誰もが排除されない包摂的なアプローチを重視します。

機能・活動

センターは、**総合窓口**、**学生相談所**、**精神保健支援室**、**コミュニケーション・サポートルーム**、**留学生支援分野**の各支援窓口と、学生どうしの支えあいの活動を推進する**ピアサポートルーム**を設置しています。各室の活動を通して、

・個別の支援活動：カウンセリング、精神科診療、発達障害支援、関係者への支援（コンサルテーション）、留学生支援、危機対応
・コミュニティへの支援活動：学内相談窓口間の連携・協働、学外の援助資源との連携、予防教育、啓発、ピアサポート（アウトリーチによる実践）、構成員への研修プログラム、環境改善のための働きかけ、学生団体等との協働、大学執行部への施策提言等

を行います。また、これらの実践活動を支えるための研究活動を行い、その成果をキャンパス内にとどまらず、広く社会に還元します。

青年期の課題を中心に1対1のカウンセリングを行うことが主だったと思います。近年はそれ以外の要素が複雑に絡んでいて、単純には解決できないケースが目立っています。

高野　学生相談所では長期の支援が必要な学生さんが増えているという印象があります。一人あたりの相談回数は平均で8回くらいですが、卒業・修了まで継続して関わるケースもあります。

正岡　私はソーシャルワーカーとして総合窓口で主に相談支援を行っています。総合窓口は、どこにいったらいいか分からない学生さんや教職員にとりあえず来ていただきたい部署です。相談員は全部で7人。私のほかに、ベテラン職員3名、精神科医、2名の心理士がいます。異なる専門性を持つスタッフが話を聞き、それぞれの視点からアドバイスし、必要に応じて適切なところに繋いだりしています。

荒井　学生のみなさんの支え合いと自主的成長を促進するために2015年度に開設されたピアサポートルームは、相互扶助を大事にしています。ピアサポーターとして活動したいという学生さんたちも、どこかで悩みをかかえていたりします。教員の立場としてはできるだけその方々が安心でき、自分らしく活動できるような場を提供できるようにと心がけて運営しています。

大学全体のウェルビーイング

佐藤　ここ1～2年は、キャンパス全体のウェルビーイングを向上させることにも力を入れていますね。個別の支援と並行して、キャンパスというコミュニティにいる一人ひとりがいきいきと生きられるような環境を作ることが大事ということでしょうか。

渡邉　個別の相談支援だけではもう立ちゆかない状態になっています。生きがいや生きやすさ、居心地の良さといったキャンパス全体のウェルビーイングを向上させていきたいと目論んでいます。経験がない領域なので、私たちも勉強しながら、新しい展開を考えています。

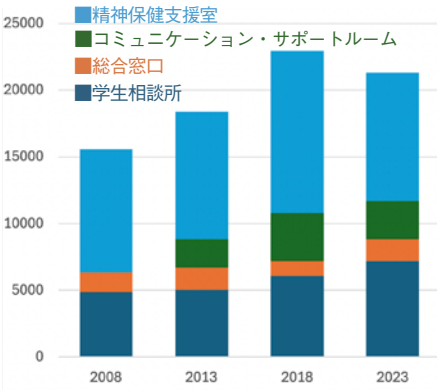
佐藤　UTokyo CompassやD&I宣言で謳われているキャンパスの多様性や包摂性を、大学構成員の日常生活や日々の活動レベルで支えているのがこのセンターだと思います。日々の相談の現場で見えてくる大学の課題もいろいろあるので、それを大学全体にフィードバックして、この大学をよくするために生かしていければと思います。学生や教職員の皆さんに、このようなセンターがあるということを知っていただき、ぜひ積極的に利用していただきたいと思っています。

センターの歩み

2008年4月	学生相談ネットワーク本部を設置　本部運営「なんでも相談コーナー」開設
2010年3月	白金キャンパスなんでも相談室開設
2010年10月	本部運営「コミュニケーション・サポートルーム」開設
2011年11月	なんでも相談コーナー柏分室開設
2013年4月	なんでも相談コーナー工学部分室開設
2014年5月	弥生キャンパスなんでも相談室開設
2015年4月	ピアサポートルーム（本郷）開設
2016年3月	ピアサポートルーム（柏）開設
2019年10月	相談支援研究開発センターに改組

学生をはじめとする構成員への相談業務の中核として、構成員の福祉の向上に寄与することを目的に設置された学生相談ネットワーク本部は、2019年に相談支援研究開発センターに改組されました。

相談件数の推移



相談件数が一番多かったのは2018年度ですが、長期的傾向を見ると、一貫して増加しています。対面が制限されたコロナ禍の2020年度には減少しましたが、翌年度以降は2万件超の水準に戻りました。

附属図書館の蔵書が1000万冊を突破しました!!

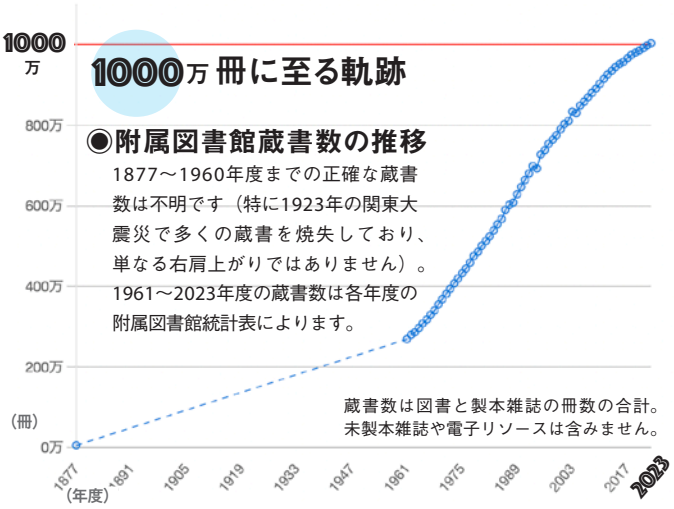
東京大学附属図書館 蔵書1000万冊記念
1000万冊のストーリー
UTokyo Library Milestone of 10 Million Volumes
→https://x.gd/11QI7

東京大学には3つの拠点図書館（総合図書館、駒場図書館、柏図書館）と27の部局図書館・室があります。これら30の図書館・室が一体となって活動しているのが「東京大学附属図書館」。蔵書数1000万冊というのは30館の蔵書の合計であり、日本の大学で初となります。記念の広報事業「1000万冊のストーリー」から、1000万冊の内訳とコンテンツの一端を抜粋して紹介しましょう。

1000万冊に至る軌跡

◉附属図書館蔵書数の推移

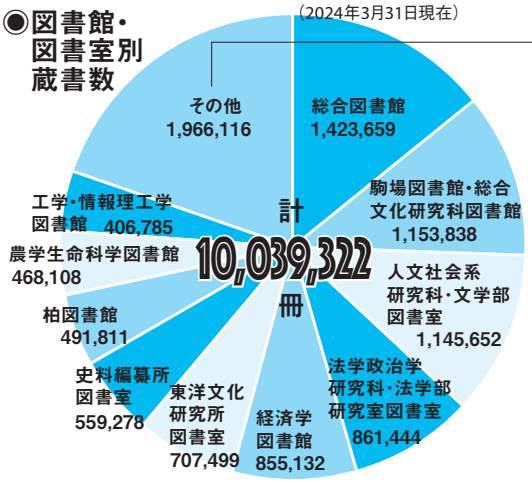
1877～1960年度までの正確な蔵書数は不明です（特に1923年の関東大震災で多くの蔵書を焼失しており、単なる右肩上がりではありません）。1961～2023年度の蔵書数は各年度の附属図書館統計表によります。



蔵書数は図書と製本雑誌の冊数の合計。未製本雑誌や電子リソースは含みません。

「1000万冊に至る軌跡」では、1877年から現在までの図書館・室の歴史を詳細な年表で紹介しています。神田一ツ橋の法理文三学部構内に設置されたことから始まる東大の図書館史。当時、法理文三学部の蔵書数は約5.4万冊でしたが、1965年度に300万冊、1980年度に500万冊、1995年度に700万冊、2010年度に900万冊を突破しました。関東大震災で多くの蔵書が失われましたが、国際連盟で復興援助の決議がなされ、ジョン・ロックフェラー・ジュニア氏を筆頭に世界中から支援を受けて新図書館（現在の総合図書館）が1928年に竣工。他にも多くの図書館・室が多くの皆様からの支援を受けて活動してきたことを忘れてはいけません。2028年12月には、総合図書館が竣工100周年を迎えます。

◉図書館・図書室別蔵書数



2023年度附属図書館統計表より（2024年3月31日現在）

社会科学研究所図書室	357,776
医学図書館	262,011
理学図書館	224,176
教育学研究科・教育学部図書室	170,503
数理科学研究科図書室	162,404
生産技術研究所図書室	151,694
情報学環・学際情報学府図書室	126,054
（総文）グローバル地域研究機構アメリカ太平洋地域研究センター図書室	77,305
物性研究所図書室	68,121
大気海洋研究所図書室	60,539
地震研究所図書室	60,538
（法）近代日本法政史料センター（明治新聞雑誌文庫）	58,628
薬学図書館	52,104
先端科学技術研究センター図書室	49,081
（総文）自然科学図書室	33,088
宇宙線研究所図書室	24,511
（学環）社会情報研究資料センター	14,851
総合研究博物館図書室	12,303
医科学研究所図書室	429

私が選ぶ 1/1000万 冊

在職or在学中に本学の図書館・室で出会った1冊というテーマで、図書館運営に携わる教員のうち15名がコラムを執筆しています。本好きの先生方が選んだ一冊は!?

萩原朔太郎『月に吠える』初版謹呈本

（感情詩社・白日社、1917年）

坂井修一
附属図書館長

朔太郎が鷗外に献呈した初版本（鷗外文庫）。発禁処分で削除した跡が残ります。

水村美苗『日本語が亡びるとき』

（筑摩書房、2008年）

石田 淳
駒場図書館長

普遍語たる英語を優先する現代社会で言葉を読み継ぐ国語の価値を問う一冊。

田辺繁治『生き方の人類学』

（講談社現代新書、2003年）

本田利器
柏図書館長

防災文化はどう定着するのかとの問題に「実践知」というヒントを与える一冊。

図書館・室自慢の1冊

附属図書館を構成する各図書館・室が所蔵するものの中で「これを自慢したい！」というイチオシの資料を紹介しています。いずれ劣らぬ東大のお宝を確認してみよう！

On the Origin of Species

理学図書館

『理学部ニュース』第51巻1号より　Photo: Koji Okumura

チャールズ・ダーウィン『種の起原』の初版本。1859年に発行された1250部のうちの2冊を所蔵しています。

教育掛図

教育学部図書室

大正～昭和初期に文部省が発行した尋常小学校等の教育掛図コレクション。左は尋常小学理科掛図（大正4年発行）のイカ。

小野秀雄コレクション

情報学環図書室

新聞研究所の初代所長・小野秀雄が収集した、災害報道を中心としたかわら版や錦絵などのコレクション。

今日の 1/1000万 冊

東京大学OPACからランダムに検索した結果をその都度表示する運だめし企画。思いがけない1冊と出会えます。

あなたが出会った 1/1000万 冊

SNSに推しの1冊を紹介する投稿企画。ハッシュタグ #UTokyoLibrary10MVolumes　#私が選ぶ1000万分の1冊 をつけて投稿しよう！

◉総合図書館では10月1日から令和6年度附属図書館特別展示「華ひらく書物文化：俳諧・戯作の世界」を開催します。

ワークショップ「RE: THINKING UTOKYO」を開催

新しい大学のリーダーズが描き出す未来予想図!?

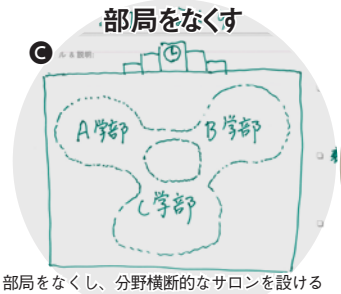
16日の回には、役員20名、部局長または副研究科長・副研究所長級の教員32名の他、総長補佐等を含む計62名が参加しました。

部局長または副研究科長・副研究所長級の教員、総長補佐、そして役員が集まって新しい大学モデルを考えるワークショップが、7月11日と16日の両日、農学部3号館の大会議室で行われました。大学の変革について自由闊達に議論するために設けられた場では、どんなアイデアが出てきたのか。参加者が描き出した新しい大学モデルの未来図からご想像ください。

テーマの凡例　Ⓐ＝知の社会的価値を創出するための機能拡張　Ⓑ＝21世紀型リーダーを育てる教育改革　Ⓒ＝世界水準の研究の更なる推進

部局をなくす

Ⓒ



部局をなくし、分野横断的なサロンを設けることで、究極の学際融合を果たす。

UTokyo 大逆転計画

Ⓒ

逆転期間を設け、執行部は事務仕事を学び、事務は大学の意志決定を主導…！

RE: THINKING UTOKYO

14:00	開会挨拶　藤井輝夫
14:10	趣旨説明　津田 敦
14:20	アイスブレイク
14:30	東大を分解する／P-SWOT
14:50	東大を転換する／HMW?
15:00	東大を発想する／Crazy 8
15:50	アイデアのマッピング
16:10	アイデアの精緻化
16:20	プレゼンテーション
17:00	参加者ネットワーキング

本郷更地化 再開発

Ⓒ

真に分野横断型の大学になるための一案。部局間の垣根を低くするにはまず箱物から。

世界を回遊する東大人

Ⓒ

世界各地に設置した付属高を巡回。世界規模の人材循環と研究者の早期養成が可能に。

超世代・超属性 キャンパス

Ⓑ

あらゆる属性・世代の人、たくさんの「自分だけ」が集まり、協奏しあう大学に。

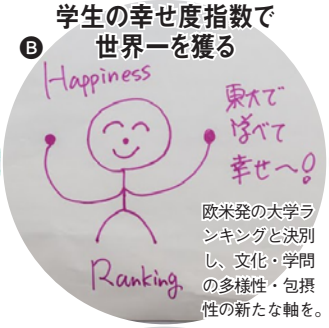
学びの廻廊

Ⓑ

どこで授業を受けてもよい螺旋教室。初めは広く学び、次に専門性を高め、再び俯瞰。

学生の幸せ度指数で世界一を獲る

Ⓑ



欧米発の大学ランキングと決別し、文化・学問の多様性・包摂性の新たな軸を。

この指とーまれ的大学

Ⓐ

大学が問題を設定し、その問題へのsolutionを持つ研究者が集まるようにする。

東大ゆりかごから墓場まで構想

Ⓒ

キャンパスに墓地を整備し、数十万の卒業生を呼び込み、そして遺産も大学へ!?

スマートグラス義務化

Ⓐ

テクノロジーで言語と分野の壁を越える。すれ違いざまにその人の研究内容が把握可。

教職員シャッフルproject

Ⓐ

所属部局をシャッフルしてなるべく遠くの分野に飛び込むことで全体の研究力強化を。

※言わずもがなですが、上の掲載が実装を意味するわけではありません。

役員や部局長をはじめ、大学の運営に携わる教職員が2日間でのべ116人も集結するという大規模なワークショップは、大学の置かれた現状をあらためて確認する総長の挨拶で始まり、経営戦略課とともに企画を一から練り上げてきた理事の司会で進行。参加者たちは5〜6名ずつ計11のグループに分かれ、著名人の肖像カードを見て「もしXXXが総長だったら」を考えるアイスブレイク、大学の強み・弱み・機会・脅威を考えるSWOT分析などのウォームアップでチーム連携を深めた後、3つのテーマを意識しながら、改革のアイデアを議論しました。

執行部から事務職まで構成員の所属や役割を入れ替える、本郷をいったん更地にして建てた平屋の円形建物に全部局を集める、Teach by English から Teach to Englishへ転換する、世界中に附属高校を置いて教員と学生が巡回する、構成員全員で全キャンパス縦断駅伝を行う、スマートグラスを義務化して行き交う人の研究内容などがわかるようにする、世界の大富豪を執行部に迎える……。現実からしばし離れ、理想の大学を自由に考えた3時間。会場には、最後まで真剣に、そして、ちょっと楽しそうに大学の未来を語るリーダーたちの姿がありました。

教養教育の現場から

リベラル・アーツの風

第65回

東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

第一人者が次代へ繋ぐ再生可能エネルギーの希望

／全学自由研究ゼミナール「Road to 2050：環境エネルギー政策の達成とビジネス」

環境エネルギー科学特別部門
客員教授
田中 良

太陽光発電の第一人者として

——田中先生は日本の太陽光発電の第一人者として活躍されてきました。

「電電公社（現NTT）の電気通信研究所で蓄電池の劣化判定法を確立した後、1995年からNTTの環境ビジネス本部長として太陽光発電の導入拡大に資する研究開発を進めました。2006～2011年には、FIT（固定価格買取制度）を導入する際の最適なシステムを探る資源エネルギー庁の公募を機に、9カ国27種の太陽電池の性能を調べました。日本一の日照時間を誇る山梨県北杜市に10万平米の土地を借りて総発電容量2メガワットの太陽光発電所を構築した、日本初の大規模太陽光発電の実証実験です」

——日本のメガソーラーの嚆矢ですね。

「機種別、設置角度別といった評価はもちろん、駐車場の屋根に取り付けた場合、ビルの壁に取り付けた場合（BIPV）、風力発電と併設した場合、水田の上に取り付けた場合（ソーラーシェアリング）など様々な想定でテストを行いました。そうした数々の検討を経て2012年に導入された日本版FITは、全体的にはよい制度でしたが、買い入れ価格が高すぎたのが問題でした。地球環境のための太陽光発電なのに儲けようとする風潮が広がり、安さ至上主義が蔓延し、気づくと全てが中国産に置き換わって現在に至ります。こうした歴史を振り返りながら、再生可能エネルギーの社会実装に関わる課題を学生に伝える講義を行っています」

脱炭素のまちづくりの現場にて

——脱炭素の地方創生もテーマだとか。

「2019年に発足したサステイナブル未来社会創造プラットフォームの活動です。岩手県の紫波町では、果物を栽培する際のエネルギー使用の最適解を導くマイクログリッドを災害にも適用できるよう整備しています。過去には沖縄県の久米島で風力と太陽光のハイブリッド発電システムの実証実験を進めました。島になかった港をクレーンで作るところから始めました。まず現地の状況を見て現場に最も適した姿を探るのが私のやり方。学生たちは環境に興味が高く、地球環境の悪化状況を理解していますが、環境と太陽光発電との結びつきなどはピンときていないようです。研究も教育も「百聞は一見に如かず」。座学だけでなく、現場を体験する見学実習もできるとよいのですが」

——来たる10月23日には先端研のENEOSホールで「情報とエネルギー」がテーマのシンポジウムを開催されます。

「昨今はAIの進化が目覚ましいですが、AIの活用が増えれば流通するデータ量が増え、処理に莫大な電力が使われます。情報化社会を支えるエネルギーをどう確保するのか。元総長の小宮山宏先生、NTT副社長の川添雄彦さんに講演いただき、私もディスカッションに加わります」

「鍵はサーキュラーエコノミーとカーボンプライシングだと思っています。動脈産業と静脈産業を組み合わせて循環させる仕組みを回すため、必要なお金は国民みんなで賄う。新規に資源を掘り起こすのではなく、既存の資源を有効に使い回すのです。たとえば、自動車を作ったらボディからバッテリーまですべてを再び活用する。虫は死んだら分解されて次の命の種になります。自然界には無駄がなく、人間だけが無駄を産んでいます。やり方さえ間違えなければ、地球上の全エネルギーを太陽光発電で賄えます。自然界の仕組みを見習わないといけません」

❶田中先生が主導した北杜市のメガソーラー。世界初となる複数の系統安定化機能を備えます。❷沖縄電力と連携して設置した久米島の風力・太陽光ハイブリッド発電システム。島で必要なエネルギーの約半分を賄います。❸水田に降り注ぐ日光の半分ほどを太陽光発電に使うソーラーシェアリングの様子。光飽和点を超える過剰な日光を電気に変えて売ることで農家の収入を安定させることが可能に。

教養教育高度化機構（内線：44247）

ぶらり構内ショップの旅

第28回

Cafeteria KOMOREBI@駒場キャンパスの巻

学生とのコラボで完成した珈琲

駒場キャンパスの21 KOMCEE WEST地下一階にあるカフェ「Cafeteria KOMOREBI」。店名には、木漏れ日でコーヒーを飲むようにゆったりとした時間を過ごしてほしいという思いが込められています。コロナ禍下の休業を経て、昨年9月末に再オープンしました。

メインのコーヒーは、深煎りの「KOMOREBI MILD」と浅煎りの「KOMABA FRUITY 2024」の2種類。美味しいコーヒーを飲んでもらいたいと、駒場のコーヒー専門店「The Coffeeshop Roast Works」に作ってもらったオリジナルブレンドです。FRUITYは、今年4月にリニューアル。インカレサークル「東京大学珈琲同好会」に声をかけ、Roast Worksと共同でより美味しいブレンドを製作してもらいました。ブラジル産の豆をベースに作ったコーヒーは、チェリーやヘーゼルナッツのような風味がある、と話すのはKOMOREBIを担当する東京大学消費生活協同組合の持田佳也さん。会議などで大勢が集まるときには、お得なポットサービス（2L￥3000、2.5L￥3750）を「是非ご利用していただきたい」と言います。駒場キャンパス内であれば学内配達も可能です。

KOMOREBIを担当する持田佳也さん

ホットサンド（ハムチーズとチキンバジル各￥450）やパンやデザートも販売しています。ホットサンドに珈琲が付いたお得な「モーニングセット」（11時半まで。￥600）は、毎朝買う常連客もいるとか。地下にあるため、KOMOREBIの存在を知らない人が多いのが課題だと話す持田さん。「より広く知ってもらい、多くの人にKOMOREBIオリジナルのコーヒーを飲みに来ていただきたいです」

今後はコーヒー豆も店頭で販売する予定です。

営業時間●10時ー17時。土日祝定休。

東京大学珈琲同好会のコーヒー通の学生とRoast Worksで行った「カッピング」と呼ばれるテイスティングの様子。様々な味を確認後、「KOMABA FRUITY」が完成しました。

https://www.utcoop.or.jp/news/news-127948/

価格は税込

#WeChange Now

第9回　ジェンダー・エクイティ推進オフィス通信

ワークライフバランスに着目した研究者支援

ジェンダー・エクイティ推進オフィスでは、「UTokyo男女+協働改革＃WeChange」の3つのターゲットの一つ、「02 院生からシニアまでのシームレスな女性研究者キャリアアップ」の一環として、6月から「ワークライフバランスを重視する研究者のためのアカデミアキャリア構築スキルコース」を実施しています。このコースでは、現在、およそ100名の参加者（対象者は東京大学に在籍する博士課程学生・研究者。性別は限定せず）が、ワークライフバランスを保ちながら、限られた時間の中で最大限の研究成果を出すことを目指したいくつかのアクティビティに取り組んでいます。例えば、「ライティングチャレンジ」では、Slackを活用して、参加者同士で励まし合いながら、研究時間（主に論文執筆や研究費申請書類などの書き物の時間）を確保するアクティビティを行い、「ネットワーク・マッピング・ワークショップ」では、マップ上に現在の研究ネットワークを書き込むことで、研究に関わる人脈を可視化し、人脈をさらに広げていく方法について参加者同士でディスカッションを行いました。

参加者からは「作業にかかる時間の見通しの甘さも浮き彫りになったので、もう少し着実な計画を立てつつ、今後もがんばります」（ライティングチャレンジ）、「どういうビジョンを持ってネットワーキングを行うかが明確になりました」（ネットワーク・マッピング・ワークショップ）といったコメントを頂戴するなど、ご好評をいただいております。

本コースは今年度末まで行います。来年度も同様の研究者支援コースを開催する予定です。ジェンダー・エクイティ推進オフィスでは、このような活動も行っていることを知っていただけると幸いです。

（特任研究員　久保京子）

←締切済です

https://wechange.adm.u-tokyo.ac.jp/

ワタシのオシゴト 第220回

RELAY COLUMN

研究推進部
国際研究推進課 小原和樹

国際化の観点から研究をサポート

デスクにて。撮影は同僚のフィーガンさん

この4月に着任した国際研究推進課では、大学連合、学長会議等、大学単位での国際的な活動を担当しており、その中でも私は、主に海外拠点に関する事業やアジア地域の大学連合に関連したイベント・活動のロジや会計業務に携わっています。イベントの開催に伴う学内の手続きは、前例が少ないケースも多くあり、関係部署の方々に確認、相談しつつ、日々業務を進めています。

入職後、初めての配属先は農学部。総務課で科研費、特別研究員（PD,RPD）を担当していましたが、学生向けのイベントや国際シンポジウム等、課の垣根を越えて、様々な行事のお手伝いをする機会がありました。こうした経験や繋がりが、現在の業務で大きな助けとなっています。

その後、本部研究資金戦略課を経て、昨年度は、日本学術振興会（JSPS）の北京研究連絡センターで業務を行いました。「コロナ禍」以降、人の往来が戻りつつある中国で、日常のあらゆる場面でデジタル化の波を感じつつ、日本から中国を訪れる先生方のサポートや、現地のJSPS同窓イベントの企画を行いました。

私生活では、趣味であるマラソンに参加しようと、旅行も兼ねて中国各地を訪れました。現在、10月のフルマラソンに向けて練習中です！

昨年の北京マラソンにて。自己ベスト更新！

得意ワザ：乗り物酔いに強い
自分の性格：物事に細かい、心配性
次回執筆者のご指名：大溝真由美さん
次回執筆者との関係：農学部時代の上長
次回執筆者の紹介：外部資金のプロ、頼れる上司

専門知と地域をつなぐ架け橋に FSレポート！

Field Study

第33回

法学部卒業 福田 颯

東布施で東布施と東布施を考える

私たちは昨年、富山県黒部市の東布施地区に足を運び、地域の未来を考える活動に参加しました。人口が1000人を切り、高齢化率は4割に迫るという中山間地域で「アクションプランの再構築」に取り組むという課題。その壮大さに、正直はじめは手をこまねいていましたが、熱意あふれる方々と交流し続けたことで、たくさんのことを学ばせていただき、それを補助線として一定の結論を見出すことができたと思います。

さて、東布施を初めて訪れた際に強く印象付けられたのは、その魅力の多さです。雄大な風景、伝統の迫力、にぎやかな地域活動など、住民の方々が「大したものではない」と仰るところでも、東京から来た身には目新しい「宝」が隠れている。それを探し、共有することが、大きな使命になるし、人口減少などの課題の解決にもつながると感じました。

地域の方々と作り上げた「東布施マップ」

二度目の活動では、地域の生業を活かした「東布施フェス」を企画しました。竹をランタンにしたり、山菜を使った肉じゃがなどのレシピを紹介したりと、斬新なアイデアをもとに、魅力発信を試みるという突拍子のない提案。地域の方々が柔軟に取り入れてくださったことで、良い種をまけました（一部は今も続いているようです）。

最終回では、集大成として、地域資源をパッケージ化する提案と実践（「東布施めぐり」）を行いました。結局、私たちと東布施地区の結論は、魅力を打ち出すうえで背伸びをする必要はないというものでした。それを前提に企画を考え、FS終了後も持続するような「アクションプラン」につながるような工夫ができたと思います。

美しい棚田が広がる田籾地区

地域力創造の文脈ではよく、「よそ者、若者、ばか者」の力が必要だという声が聞かれます。しかし、いつまでもそこから脱することができなければ、せっかくの努力も上滑りに終わってしまいかねません。我々は、地域に溶け込ませていただいたことで、もう一歩前に進めたのではなかろうかと振り返っています。

じっくりと時間をかけ、継続的に活動をするFSは、参加前に想像だにしなかった貴重な経験を与えてくれました。活動を支えてくださった方々と、ともに動いてくださった地域の皆さまに、心から御礼を申し上げます。

※メンバーはほかに郝思璐（学際情報学府2年）、川田真弘（法学部卒業）、土屋皓平（法学部4年）、西野清花（文学部4年）

インターブリターズ・バイブル　第205回

情報学環 教授
科学技術コミュニケーション部門　佐倉 統

オオカミが来た！にならないために

2024年8月8日、宮崎県沖で大きな地震があり、南海トラフ地震臨時情報の巨大地震注意報が出された。2017年にこの制度が制定されてから初めてのことである。同時に、このような注意報・警報の難しさを改めて浮き彫りにする結果になった。

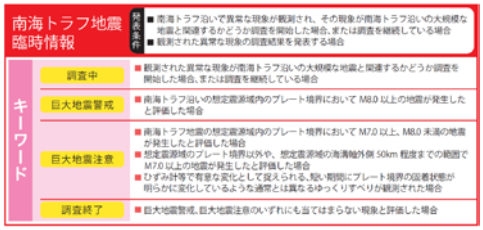
この注意報は、南海トラフ沿いで一定の基準を満たす地震が発生した時に出されるもので、「今後1週間程度、平時よりも後発地震の発生する可能性が高まっている」との判断にもとづき、関連自治体に「避難態勢の準備」を呼びかけた。自治体の数は29都府県707市町村におよぶ。岸田首相もメディアを通じて同様のメッセージを発した。

さて、この注意報を受けた私たちは、何をしたらいいのだろうか。私は、正直、戸惑った。避難が推奨されているわけではない。「注意」より一段上の「警戒」になると避難が求められるらしいが、今回はその手前だ。政府の地震本部も、「緊急に何かをすべきというわけではない」と繰り返した。

避難の準備をせよ、しかし何かをすべきというわけではない――どうせいちゅうねん？？

この注意報を受けて、花火大会を中止にしたり、海水浴場を閉鎖したりといった「対応」が見られた。ホテル旅館のキャンセルもあった。野村総研の試算によると、観光業への打撃は3か月間で1,964億円という。これをどう評価したらいいのだろうか。損失は出たが、地震で生命が失われたり危険にさらされることに比べればずっとましだ、ともいえる。事前の予防リスクの提示には、どうやってもなんらかの不平不満はつきものだ。

今回思ったことのひとつは、複数の異なるリスク群の総体的な見取り図の必要性だ。地震は大きなリスクだが、経済的な損失も、娯楽がなくなる精神的苦痛もリスクだ。特定の単一のリスクだけをターゲットにしたリスクコミュニケーションは、受け手やひいては社会全体の視野を狭くしがちなのではないか。個々の具体的なリスクの評価は難しくても、複数のリスクを考慮して、総合的かつ主体的に判断する姿勢が重要なのだと思う。



南海トラフ地震臨時情報		
	発表条件	■南海トラフ沿いで異常な現象が観測され、その現象が南海トラフ沿いの大規模な地震と関連するかどうか調査を開始した場合、または調査を継続している場合 ■観測された異常な現象の調査結果を発表する場合
キーワード	調査中	■観測された異常な現象が南海トラフ沿いの大規模な地震と関連するかどうか調査を開始した場合、または調査を継続している場合
	巨大地震警戒	■南海トラフ沿いの想定震源域内のプレート境界において M8.0 以上の地震が発生したと評価した場合
	巨大地震注意	■南海トラフ地震の想定震源域内のプレート境界において M7.0 以上、M8.0 未満の地震が発生したと評価した場合 ■想定震源域のプレート境界以外や、想定震源域の海溝軸外側 50km 程度までの範囲で M7.0 以上の地震が発生したと評価した場合 ■ひずみ計等で有意な変化として捉えられる、短い期間にプレート境界の固着状態が明らかに変化しているような通常とは異なるゆっくりすべりが観測された場合
	調査終了	■巨大地震警戒、巨大地震注意のいずれにも当てはまらない現象と評価した場合

内閣府「防災情報のページ」より
https://www.bousai.go.jp/jishin/nankai/rinji/index3.html

ききんの「き」

寄付でつくる東大の未来

第59回

本部渉外課戦略チーム　小林文香

東大から寄付者へ ありったけの感謝を

7月26日（金）に「東京大学基金活動報告会※＆感謝の集い2024」を開催しました。日ごろの感謝の気持ちや、いただいたご寄付によって実現したことを寄付者にご報告する、年1回の大事なイベントです。

今回は、報告会後に安田講堂の3階・4階のロビーを利用して開催された「感謝の集い～UTokyo FUN Meeting～」の様子をご紹介します。

この「感謝の集い」という企画、過去にも何度か開催していたのですが、今回は実施場所・形態などを一から練り直し、4年ぶりのリニューアル開催となりました。「UTokyo FUN Meeting」というサブタイトルは「東大基金」でつながるすべての人たちが、出会い、交わり、さらに深くつながる場を創出するとともに、様々な方法で感謝が伝わり、楽しんでいただけるように、という想いからついたものです。

会場には学内の役員・部局長等が直接寄付者と対話し、日頃の謝意を伝えるエリアや、様々なプロジェクト基金がポスターや模型・モニター等を用いて普段の活動や寄付によって実現できたことを直接ご紹介したり、イチ公※や藤井総長のパネルと一緒に写真を撮ったりすることができるエリアを展開しました。

当日の参加者からは「先生と直接話すことができて嬉しかった」「研究内容の話が面白かった」などのお声をいただきました。中にはその場で「来年も来たい」と仰る方も。嬉しい感想には一安心しつつ、反省点・改善点は慎重に振り返っていく予定です。

ちなみにこの日、この企画のために集まった役員・部局長等は約40名。所属や研究分野を超えてこの人数の先生方が一堂に会し、寄付者と談笑したりパンフレット等を使ってご自分の所属先を紹介なさったりしているのは一職員の立場から見てもなかなかに貴重な光景だったと思います。それだけ学内でも寄付に対する関心が高まっているのだと感じ、自分の業務に対して再度背筋が伸びる思いでした。

改めてこのイベントの成功は、多くの学内関係者の協力なしには実現できませんでした。この場を借りて御礼申し上げます。

※活動報告会の様子は後日東京大学基金YouTubeで公開されます。

感謝の集いの一コマ。寄付の成果を直接寄付者に紹介する機会はとても貴重です。

※東京大学運動会の公式マスコット

トピックス

全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles) に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル（一部省略している場合があります）
8月15日	本部広報課	フォーブス誌の「50 Over 50」にギータ・メータさんが選出
8月19日	総合文化研究科・教養学部	地域文化研究専攻の木宮正史教授が令和6年度外務大臣表彰を受賞
8月26日	附属図書館	デジタルアーカイブジャパン・アワード2024を受賞！
8月27日	総合文化研究科・教養学部	UTSSIの新ロゴマークを決定
8月27日	大学総合教育研究センター	緑・農・住のまちづくりの可能性を探究・発信するMOOCの新講座を開講
9月2日	本部渉外課、人文社会系研究科・文学部	文学部の学問を支える基金　寄付募集を開始
9月2日	広報室	海洋マイクロプラスチック問題に取り組む
9月3日	宇宙線研究所	カナダとハイパーカミオカンデ実験についての覚書を締結

CLOSE UP　スポーツ先端科学連携研究機構の新ロゴマークが決定（総合文化研究科・教養学部）

「UTSSIとの最初の関わりは、2019年に恩師の誘いで障害をもった子どもたちを対象としたUTSSI主催のキャッチボール教室にスタッフとして参加させていただいたことでした」(受賞者・塚本康司助教のコメント)

東京大学スポーツ先端科学連携研究機構（UTSSI）では、東京大学がスポーツをキーワードにした全学研究組織を設置していることを多くの方々に認知してもらえるよう、新ロゴマークの学内公募を実施し、厳正な審査の結果、新ロゴマークが決定しました。今後、このロゴマークは、UTSSIウェブサイト、UTSSI主催等イベントポスター等で活用される予定です。UTSSIの5文字のうち「i」を躍動・飛翔する人間の身体として中央に配置。その周囲に2つの「s」を螺旋状に描き、身体を多角的に調査分析する研究者の視点、躍動する身体の軌跡、飛翔する翼、陸上競技のゴールテープを表現しています。背部には「UT」の2文字が余白に浮かび上がるように扉または盾の図形を描き、研究を次の段階に進める意志と東京大学の伝統と格式を表現しました。配色にはUTokyoカラーを用いています。

CLOSE UP　緑・農・住のまちづくりを発信するMOOC 新講座を開講（大学総合教育研究センター）

https://coursera.org/learn/contemporary-garden-city-concept-from-asia

MOOCの新講座「Contemporary Garden City Concept from Asia」が8月19日に公開されました。この講義では、都市の郊外がさまざまな農地·緑地に富んだ豊かな居住空間となる可能性をさぐり、日本固有のまちづくりの視点、理論、実践を世界に発信しています。工学系研究科の横張真教授を中心とした、緑・農・住のまちづくりを研究されている先生方によるこの講義は、都市計画、土地利用計画、緑地計画を、日本・アジアの視点と欧米の視点を比較する形で解説するスタイルで展開されます。欧米の合理性だけを求める考え方が必ずしも「合理的」なわけではなく、日本のまちづくりのように、曖昧さを許す発想が時にはレジリエンスを高めることもあると言われます。この講座では、さまざまな事例等を交え、日本固有のまちづくりの視点、理論、実践を世界に発信しています。

表紙について

今号の表紙は、乗鞍岳堂ケ原に建立された「朝日の小屋」址碑と宇宙線研究所附属乗鞍観測所です。当地は高山における日本の宇宙線共同研究の発祥の場。通称「朝日の小屋」は、朝日新聞の朝日科学奨励金を受けて1950年に建設された木造平屋建て15坪の小屋です。中には宇宙線の観測機器が設置され、隣接した場所に設置された東京大学宇宙線観測所（後に宇宙線研究所附属乗鞍観測所）とともに、その分室として日本の宇宙線研究の発展に貢献。その後、老朽化によって倒壊の危険が生じたため、2018年に解体・撤去されました。8月に建立された碑は、幅180cm、高さ110cm、奥行き100cmの地元産山辺石で造られ、「朝日の小屋址 高山における日本の宇宙線共同研究発祥の地」というタイトルと解説文がインド産黒御影石の文字板に刻印されたもの。標高2770mの高地から宇宙線研究の発展を見守り続けます。

小屋の跡地に建立された址碑

1998年当時の朝日の小屋

「グローバル・コモンズ・フォーラム」開催

10月8日（火）、本学と理化学研究所の共催による「グローバル・コモンズ・フォーラム」が丸ビルホール（丸の内）にて開催されます。人類の共有財産である安定的な地球システム（グローバル・コモンズ）は、崩壊の危機に瀕しています。「プラネタリー・バウンダリー」の提唱者であるポツダム気候影響研究所のヨハン・ロックストローム教授による基調講演に加え、国内外の産官学のリーダーによる「グローバル・コモンズのガバナンス」「ネイチャーポジティブ経済とファイナンス」「カーボンニュートラルへのパスウェイ」「システム転換とレジリエンス」をテーマとしたパネルディスカッションを行い、より良い未来に向かうための戦略について議論します。https://pco-prime.com/gcf2024/

CENTER FOR GLOBAL COMMONS

就任の挨拶

9月1日に就任した新監事の略歴と就任に当たっての挨拶を掲載します。

長い航海の先で巡り合ったミッション

9月1日付で本学常勤監事に就任いたしました亀井です。

私は1985年に医学部保健学科を卒業しました。男女雇用機会均等法施行以前の当時、長く仕事を続けられる環境を求めて公認会計士の資格を取得し、現在に至るまで会計士として仕事を続けてきました。

久しぶりの母校はキャンパスの石畳の坂などにもハッとするほどの懐かしさを覚えます。しかしながら、私がこの場所に戻ってきたのは、ノスタルジーに浸るためではなく、本学がUTokyo Compassに示された目標を達成し、諸課題を解決し、さらなる発展を果たすという変革を、適切なガバナンスのもとに遂行できるよう助力するというミッションのためと心得ています。

私は大手監査法人のパートナーとして、グローバルにビジネスを展開する金融機関や資産運用ビジネス等に対する監査やアドバイザリー業務に長年携わってきました。財務、会計、監査の分野の専門家ですのでその分野は当然ですが、自分の役割を狭く定義することなく、企業ビジネスの厳しさを目の当たりにしてきた経験、パートナーとして監査のリーダーシップをとってきた経験、社外役員として企業ガバナンスに携わってきた経験、さらには仕事と育児の両立に苦労した経験、ビジネススクールへの留学経験等、今までのキャリアの中で培ってきたバックグラウンドをフルに活用し、ガバナンスを通して本学のさらなる発展に貢献したいと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

監事
亀井純子
KAMEI Junko

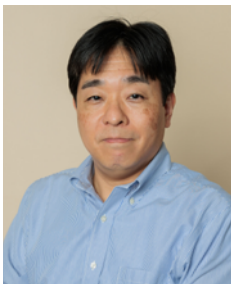
昭和60年3月　本学医学部卒業
昭和61年9月　太田昭和監査法人（現：EY新日本有限責任監査法人）
平成15年11月　三菱証券株式会社（現：三菱UFJモルガン・スタンレー証券）
平成18年10月　新日本監査法人（現：EY新日本有限責任監査法人）金融事業部パートナー
令和3年7月　亀井公認会計士事務所代表
令和3年8月　独立行政法人自動車技術総合機構 監事（非常勤）
令和4年6月　三菱化工機株式会社 社外取締役（監査等委員）
趣味：（下手ですが）テニス、（昨年から）FC東京応援

変革する東京大学への期待

このたび監事を拝命し、1992年に法学部を卒業して以来久しぶりに本学の一員となりました。企業法務の弁護士との二足の草鞋を履く非常勤の立場ではありますが、本学が適切なガバナンス及びコンプライアンス体制を維持しつつ、世界トップクラスの大学としてさらに発展していけるよう、微力ながら貢献したいと考えております。

まだ就任したばかりですが、毎週多くの会議に出席して、総長、理事、執行役や職員の皆様と会話するなかで、本学が変革への強い意志を持ちながら、構成員のそれぞれが真剣に議論して課題解決に取り組まれていることを実感し、頭が下がる思いです。私が学生だったころと比べて飛躍的に複雑化・高度化した本学に驚かされるとともに、本学が果たしている役割の重要性や社会からの期待の高さも改めて実感しております。

監事の視点では、国立大学法人である本学のガバナンス体制は民間企業と比べてもかなり複雑であり、また非常に多種多様な構成員を抱えているといった特色を有していることから、適正かつ合理的・効率的な業務運営を行うことは必ずしも容易ではないと考えておりますが、本質的な課題を把握し、それを少しでも解決できるように取り組む所存です。どうぞよろしくお願いいたします。



監事
山口大介
YAMAGUCHI Daisuke

平成4年3月　本学法学部卒業
平成4年4月　株式会社長銀総合研究所
平成13年10月　アンダーソン・毛利・友常法律事務所（現：アンダーソン・毛利・友常法律事務所外国法共同事業）
平成15年4月　日本政策投資銀行非常勤嘱託弁護士
平成19年5月　バージニア大学法科大学院修了（LL.M.）
平成19年9月　Carlsmith Ball法律事務所
平成20年3月　アンダーソン・毛利・友常法律事務所（現：アンダーソン・毛利・友常法律事務所外国法共同事業）
平成22年1月　同パートナー（現職）
趣味：旅行、写真、お酒

UTokyo　**アミノ酸の力で明日も元気に!**

記録的な猛暑を乗り越え、季節の変わり目でお疲れのみなさん、アミノ酸でエネルギー補給しませんか？ 100年以上にわたる東京大学のアミノ酸研究が形となった「体力式®アミノ酸ゼリー」は、爽やかなりんごの風味と柔らかな飲み口で、小さなお子様からお年寄りまですべての方に美味しく簡単にお召し上がりいただけます。疲れたときや朝の忙しい時間はもちろん、運動中の栄養補給にもおすすめです。店舗では1個でも買えます。1個195円（税込）です。（植）

UTCCからのお知らせ

体力式®アミノ酸ゼリー
18個セット
各￥3,200（税込）

オリジナル包装紙のギフトラッピングもあり!

七徳堂鬼瓦

血の通った論点に耳を傾ける

「多様性の海へ：対話が創造する未来」――UTokyo Compassの表紙を飾るフレーズです。科学コミュニケーションに携わる身のため、「対話」が気になります。想定しているのは、誰と誰の、何を目的とした対話でしょう。

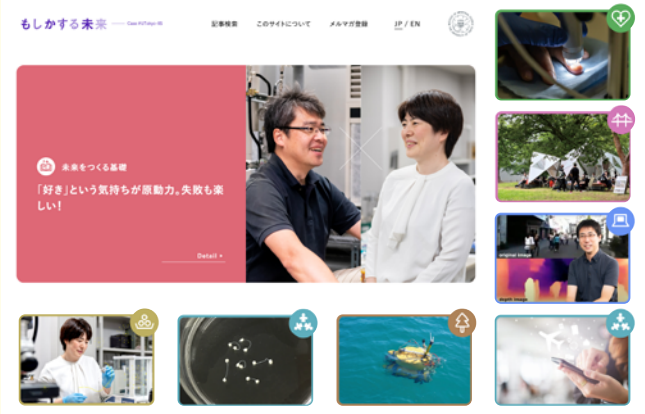
私が科学コミュニケーションの経験を積んだのは、日本科学未来館です。東日本大震災が起きた2011年前後を過ごし、同僚や来館者と、社会の中での科学技術の、科学技術に対する私たちの、立ち位置や価値を問い続けました。さまざまな知恵を使い、私たちがよりよく生きていけるよう、科学コミュニケーションで何をすべきか。展示制作にイベント企画に、試行錯誤を重ねる中で痛感したことこそ、「対話」の重要性でした。

ある時、出生前診断の是非を問うミニ展示を企画しました。検出内容や精度、母体への影響を技術間で比較したデータや、染色体異常を伝えられた受診者の行動傾向を判断材料として提示し、付箋を置いて来館者にコメントを募りました。来館者はすぐにはペンをとりません。意見をまとめる前に彼らが熟読していたのは、それまでに訪れた来館者たちが貼った付箋でした。受診条件の設定やカウンセラーの確保など、技術をとりまく環境整備を訴えるもの、染色体異常を心配せずに出産できる社会を望むもの、染色体異常症を不幸とみなす偏見への怒りなど、実体験に根差した、血の通った論点が並んでいました。

大学が何を社会に生み出していくか。専門家が重視する情報と論点だけでは議論に限界があるとすれば、生み出されたものを受取る側にいる人々を対話の場に招き、言葉に耳を傾けてはどうでしょう。何を問うべきかから共に考え、判断に必要な情報を特定する。専門家はその結果を軽視せずに専門に生かす。「未来を創造する対話」に、そんな対話も加えてはいかがでしょう。

今年、生産技術研究所はウェブマガジン※を新設しました。工学が描く「もしかする未来」を、こんなのどう？と提示します。読み手は、期待や不安を理由とともに投稿できます。どうか、研究現場に刺激をもたらす対話の場となりますように。

松山桃世
（生産技術研究所）



※もしかする未来 Case #UTokyo-IIS　https://magazine.iis.u-tokyo.ac.jp/

〒113-8654 東京都文京区本郷７丁目３番１号
東京大学本部広報課 TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhoukikaku.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp
www.u-tokyo.ac.jp